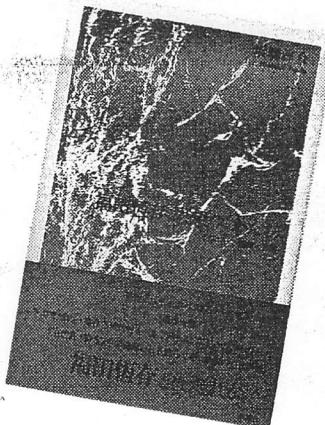


▼浜崎洋介著「福田恒存 思想の(へかたち)」——イロニー・演劇・言葉【11・22刊】四六判四二六頁・本体三九〇〇円・新曜社

# 福田恒存という人間の核心とは何か

すぐれた批評とは、批評した対象から大きな課題を引き継ぐものである

新保祐司



著者は、まだ三十一歳の人で本書は最初の著書であるが、この処女作で力量のある文芸批評家であることを示した。大学の卒業論文は、中上健次論で、修士論文は、小林秀雄論であったという。中上論は、「政治と文学」という古くて新しい問題に苦心しないために、著者が中止を通してこの問題を考へようとしたものであろうし、小林論は、昭和戦前期の混乱を生きた小林を対象にしてこの問題の解説をもくろんだものである。しかし、戦後の日本をほとんどの黙殺といふ逆説的に完璧な批判をした小林では、戦後

生まれの著者は、今現生、自分が生きている「戦後」を問いかず批評の論拠を手に入れることができないと感じたという。そんな青春を過ごした著者が、福田恒存の戦後批評に出会ったのである。「一匹と十九匹」となどが感銘を与えたに違いない。「その時の喜びともいえない驚き」と著者は書いているが、このような出会いの感動から出発しているところが、この福田論を活き活きしたものにしている。

この福田論は、博士論文を基にしたものだが、対象との出会いの「喜び」がない、平板でただよく調べていいだけ

の世に多くある博士論文とは趣を異にしている。高度成長後の日本に生まれた世代である著者を、何故福田の言葉がここまで深くとらえるのか、この問いを著者は手離さない。この一貫した誠実な姿勢が、この大部な福田論を引きしまったものにしているのである。

本書は、福田について、あるいは同時代の言説について、広く目配りし、この世間的に「保守反動」というレッテルを貼られたこともある文芸批評家の眞備というものを探究している。序章「福田恆存」と「保守」、第一章「福田恒存と存と「近代」、第二章「福田恒存と

る。こ  
は、意  
著者は  
言説に  
て、つ  
じると  
ある。  
この著者  
眼光が届  
頭に、「九  
家」と評  
点がすぐ  
らである。  
の言論人  
の喪失、  
いた福  
とられ  
るのは  
たし、  
る。そ  
の核心と  
代日本と  
て、もは  
に見放さ  
しつつ、  
応えのな

の「学者」は多いが、のよつに「人間」に  
く人は稀である。冒  
量のある文芸批評  
したのは、こういふ  
れてはいる感したか  
。今日、特に若手  
の欠陥は、「人間」  
もつといえは「肉体」  
あるからである。  
けで考えていく。  
福田恒存といふ人間  
は何か。著者は「近  
いう条件を前にし  
や自明の故郷・伝統  
れている自己を自覚  
なお残された生の手  
かで、自らの根と宿

は、趣を異にしている。高度成長後の日本に生まれた世代である著者を、何故福田の言葉がここまで深くとらえるのか、この問いを著者は手離さない。この一貫した誠実な姿勢が、この大部な福田論を引きしまったものにしているのである。

本書は、福田について、あるいは同時代の言説について広く目配りし、この世間的に「保守反動」というレッテルを貼られたこともある文部批評家の真価というものを探求している。序章 福田恒存と「保守」、第一章 福田恒存と「近代」、第二章 福田恒存と「芸術」、第三章 福田恒存と「国語」、終章 福田恒存という人間、という構成になっている。

この福田論を書きすすめるなかで、著者は「ものを考え方」ということが、そもそも他の問題だけを元手に、手ならで対象に立ち向かうことなら「ただ」ということを確信したと書いているが、この姿勢こそ、著者が福田恒存という

間から学んで、福田の戦いを分析して、それを学ぶといふにそろまでい。晚年に「い」といふ田のあねで福田に云ふように、「もう、十分なり得る」などと云ふ言説を「福田恒存」がこの求めに對するは、福生の「生き抜く」方にこなれる。頭が動いたものとしたのは、福田恒存だつた。この「生き抜く」方針は、福生の「生き抜く」方にこなれる。

の「学者」は多いが、  
のようすに「人間」に  
く人は稀である。冒  
量のある文芸批評  
したのは、こういう  
れいると感じたか  
。今日の、特に若手  
の欠陥は、「人間」  
もつといえど肉体  
あるからである。  
で考えていく。